

そらまめと感情といま合つてゐる

藤田湘子

店頭にそら豆を見つけると初夏を感じてうきうきする。塩ゆでした真つ青なそら豆の柔らかさ。塩加減も色も上出来の時は、しみじみと嬉しい。熱々のそら豆と日本酒など冷やで、ちびりちびりと合わせたくなる。

湘子は置酒歡語を好んだ。「私の酒は必ず仲間を必要とするので仲間酒と自称している。楽しい仲間がいないと、さつぱり飲む意欲が湧いて来ないのだ。したがって家でひとりの晩酌はせいぜい一合足らず、それをゆつくりと飲み、もつぱら食することに専念する」（『句帖の余白』）。「そらまめにあはれを問へば飛び出せり」「そら豆と酒一合と勇氣がある」という句もあり、ひとり酒にそらまめと交感している湘子を思えば、心愉しい。